

オルテガ思想における「過去のなるもの」についての考察  
過去性と未来性の交差

長谷川 高 生

A Study of the “ Past ” in the Thought of J. Ortega y Gasset  
Interaction of the Pastness and Futurity

Kosei HASEGAWA

近畿福祉大学紀要 第7巻 第1号  
(平成18年6月)

オルテガ思想における「過去のなるもの」についての考察  
過去性と未来性の交差

長谷川 高 生

A Study of the " Past " in the Thought of J.Ortega y Gasset  
Interaction of the Pastness and Futurity

Kosei HASEGAWA

The contemporary society, at which modern society could finally arrive, is a mass society where the average vulgar mass-man is contented with good facilities in a modern civilization. Such a mass-man entirely disregards the value of tradition in the historical past, deeply immerses himself in self-satisfaction, and oversympathizes with anonymous others.

Above all things, I think, it is the absence of the historical past and tradition in the present day that produces the basic cause of the conditions of mass society in our time. In this paper, I will study the opinion of J.Ortega y Gasset, the Spanish philosopher who is worldwide famous for his " The Revolt of the Masses " published in 1930, about the " Past ", that is to say, the past and tradition in history.

In Japan, the Third Opening has inaugurated revisions of the Japanese Constitution and the Fundamental Law of Education. These revisions may add the concepts of history and tradition to two fundamental laws, because the active Constitution and the Fundamental Law of Education are lacking in these concepts.

Ortega, the philosopher who belonged to the school of Philosophy of Life in the history of western thoughts, attempted to establish his philosophy of vital reason or historical reason, by criticizing modern rationalism and by emphasizing the importance of life, particularly pastness and futurity on the base of presentness in the temporality of life. And also Ortega, the transitional philosopher from modern to postmodern times, showed an ambivalent attitude, negative and positive, toward the past and tradition in premodern history which was refused by the modern era. Therefore, I will try to clarify Ortega's opinion on the " Past " in history, particularly historical past, traditionalism, and feudalism, by applying to them the theory of temporality which consists of pastness, presentness, and futurity in subjective time. Pursuing and considering the " Past " in history, Ortega discovers the historical structure of human beings, the actual existence of historical past, the value of tradition, and the spiritualism of feudalism. And moreover, he catches the dualism of passive, traditional, and inertia power - pastness - and positive, challenging, and active power - futurity -, in human beings both as individuals and as groups.

Finally, I intend to find the interaction of pastness and futurity in Ortega's view of the

“Past” in history, confirming the actuality of historical past, the value of tradition, and the justification of feudalism.

\*key words : temporality, pastness, futurity, traditionalism, feudalism

時間性、過去性、未来性、伝統主義、封建主義

- 一 はじめに
- 二 大衆社会状況
- 三 「過去のなるもの」と生・理性主義
- 四 歴史的過去
  - 1 大衆人における過去の欠如
  - 2 過去の性格と過去への対処
  - 3 過去と未来主義
- 五 伝統主義
  - 1 伝統的社会における伝統主義
  - 2 大衆人における伝統の欠如
  - 3 国家における伝統と企画
- 六 封建主義
  - 1 封建主義・ゲルマン精神
  - 2 ゲルマン領主の法的感覚
  - 3 ゲルマン領主の権威権
  - 4 中世の気性・経済観念
  - 5 封建主義の擁護
- 七 おわりに

## 一 はじめに

人間存在は「時間」をその本質とする。「時間」なくして人間は一瞬も生きることはできないし、存在することもできない。その時間を社会に、すなわち他人世界に關係させ拡大したものが「歴史」であり、この「歴史」も人間の存在に不可欠である。こうした時間や歴史は過去・現在・未来で成立する。したがって人間は過去・現在・未来を本質的に有しているのである。過去なくして人間は存在しないし、現在なくして人間は存在せず、未来なくして人間は存在し得ない。われわれ現代人はともすれば、こうした人間に本質的な過去・現在・未来で構成される時間性・歴史性を忘却し、「近代」という時代に特有の「現在」のみを絶対視して人生を過ごしている。本来、過去・現在・未来によって成り立つはずの人間が現在だけに特化されて生きれば、その人間存在自体が歪曲され、その生は本人が気づかぬうちに異常な様相を呈することになる。そうした生こそ現代の大衆人の生にほかならない。スペインの哲学者オルテガはこうした大衆的生に警鐘を鳴らし、生理性・歴史的理性という救済の手を差し出したのであった。本論文は論文の課題の都合上「オルテガが過

去に対していかなる見解を有していたか」を探究しその考察対象を「過去のなるもの」に限定するが、もちろん人間は過去に特化されるものではなく、過去という基盤の上に現在を持ち、さらに過去と現在を基礎として未来を構築していくのである。したがって人間は過去に囚われることなく、未来に向かって現在を生き生きと生きていけばいいのである。

筆者の見るところ、オルテガは思想的には、近代とポストモダン時代との境界に立つ生の哲学の流派に属する思想家である。この学派の思想家やフッサールなどの現象学派、ハイデガーなどの実存主義的思想家は「近代」の理性主義を批判的に検討した上で、自らの思想を打ち出すことにおいて共通している。その際彼等は「歴史的なるもの」、とくに「近代」以前の、「近代」が大略否定してきた伝統や慣習などの「過去のなるもの」に関して何らかの言質を与えているのであるが、オルテガ哲学の場合も「近代」を越える企図をもっているがゆえ、「過去のなるもの」に対して否定的あるいは肯定的な、アンビバレントな態度を表明せざるを得ない。しかも彼はその有名な著作『大衆の反逆』の大衆批判において、「近代」の生んだ大衆人を過去に対する尊敬を失った「自分の歴史を持たない人間」<sup>1)</sup>と規定し、生・理性の哲学に基づく精神的貴族主義を主張したのであるから、「過去」や「伝統」に対するオルテガの本当の態度はいかなるものであったのかという命題は興味の尽きぬ論点を含んでいる。

折りしも二十一世紀初頭の現代日本において憲法改正・教育基本法改正という二つの基本法の改正による「第三の開国」が叫ばれ、戦後日本の現行憲法・現行教育基本法には欠如していた「歴史・伝統」がこれら双方の改正基本法に織り込まれ、日本の「歴史・伝統・文化の尊重」が唱えられる方向が打ちだされている<sup>2)</sup>。では「近代」の理性主義を批判しポストモダンの方向を生・理性、歴史的理性に見定めたオルテガは、過去や伝統に対していかなる態度を呈示しているのであろうか。オルテガ思想における「過去のなるもの」に関する研究は国内のオルテガ文献には皆無であり、また筆者の見るところ海外文献にも該当するものが僅少である。そこで本論文では、そうした「過去のなるもの」に対するオルテガの言説を、とくに彼の歴史論・社会論

に属する主要な著作を通して検討し、歴史的過去・伝統主義・封建主義など「過去のなるもの」に対する彼の態度を考察してみたい。

## 二 大衆社会状況

現代社会はすでに「近代」の諸思想が深く貫徹して、もはや過去の古き善き「伝統」がいかなる社会分野にも見出せなくなっているかのごとき様相を呈している。現代はまさに近代社会の行き着いた末の大衆社会なのである。オルテガは現代大衆文明批判の嚆矢の書『大衆の反逆』で、こうした大衆社会の主役たる大衆が現代文明そのものを滅亡させる危機を創り出していると批判した。スペインの社会学者ヒネールはオルテガの言う大衆人の特徴として、「平均性」「同調性」「凡俗性」「伝統の無視」「支配性」「自己満足」「自然人」「野蛮性」を挙げている<sup>3)</sup>。これらの特徴のほとんどが現実には、の「伝統の無視」に起因するものであると言えるのではないか。というのはオルテガ自身も生涯にわたる長い哲学的省察の結果到達し見抜いたように、人間はなによりもまず「歴史的存在」なのであり、過去を唯一の宝として未来に向かって生きるものであるからである。ところが現代の大衆人は未来の自分自身や人間の未来史を規律あるもの、高度なものにしてくれる過去の人生や歴史の重荷から解放され、自らの歴史的過去についていかようにでもウソをつくのは勝手であるかのごとくに振る舞い、現在を自由に飛び回る軽き浅き非本来的な生のみならず人生を浪費している。真実のない虚飾の人生に真理は当然存在しないから、自らの歴史的過去を引き受けるつもりのない大衆人は本来的で真正な人間であることをすでに諦めてしまっているのである。歴史を必然的に必要とする人間が自らを裏切って歴史的過去や伝統を無視するからこそ、人間は理性や人権に代表される近代の諸思想によって平均化され、他者に過剰同調し、自らを凡俗化してしまう。その結果、多数大衆が社会を支配し、自己満足感にひたりつつ文明社会のなかに突然現われた自然人のごとく振る舞い、それぞれの分野で専門主義の野蛮性を発揮するのである。それゆえ多少誇張して言えば、「歴史的過去や伝統の無視」こそが、現代文明を危機に陥れている「大衆の反逆」現象の根本原因を形成しているとも言い得る。ではオルテガが「人間の唯一の宝」という「歴史的過去」や「伝統」とは何なのか。本論文ではオルテガ思想における、歴史的過去や伝統の意味、つまり「過去のなるもの」がいかに把握されているのか、その位置づけを検討してみたい。

## 三 「過去のなるもの」と生・理性主義

では「過去のなるもの」、すなわち過去性を有した歴史事象は生・理性主義を標榜するオルテガ思想においてはいかに解明され得るのか。過去・現在・未来を対象とする時間論は時間の実在を認めないマクタガートの見解は別として、プラトン、アリストテレス、ガリレイ、ニュートンなどの客観的時間を対象とするものと、アウグスティヌス、フッサール、ベルクソン、ハイデガーなどが提唱した主観的時間を主題とするものに大別される。後者に属するオルテガの生・理性の哲学も生の時間性に言及することはそれほど多くはないものの、時間性の内実を探求するフッサールやハイデガーなどの思想とかなりの異同を示しつつも、客観的時間の根源とも言える主観的時間における過去性・現在性・未来性を考察対象としている<sup>4)</sup>。

さてオルテガがその生涯にわたって主張した生・理性主義の特徴については、かなりのオルテガ研究者が言及している。筆者の見るところ彼の人間の生の哲学においては現在のなるものの根源的性格としての「現在性」は自明のこととして、さらに歴史的なる・過去のなるものの根源的性格としての「過去性」と未來的なるものの根源的性格としての「未来性」とが見いだされるのである。たとえば、R. L. プーアはオルテガの「根本的現実」の分析を基礎づける「生」(la vida)の特徴として、オルテガ自身が言及している四点、「生は自明であること」、「生は状況(環境)的であること」、「生は決断であること」、「生は困惑であること」に加えて、「生は譲渡不可能であること」を挙げる<sup>5)</sup>。またJ. E. オジェータは生の属性・カテゴリーとして、「生きるとは自覚することであり、自分を理解することであること」、「生とはわれわれの生であること」、「生きるとは世界のなかで自分を見出すことであること」、「生とは運命性であること」、「生とは自由性であること」、「生とは未来主義であること」の六点を挙げる<sup>6)</sup>。それゆえプーアの が現在性とすれば、 が過去性、 が未来性に該当しようし、またオジェータの に現在性が、 において過去性が、 に未来性が見出せよう。したがって、オルテガの生・理性主義は大きな特徴の一つとして人間の生の未来主義を有している。すなわち人間の生には自明の「現在性」を基盤として、過去のなるものと反対の未來的なるものの性格としての「未来性」が、過去のなるものの性格としての「過去性」とともに主張されているのである。

そこで本論文ではオルテガの多くの著作のうちで他

の諸文献に比して当然「過去のなるもの」が多く陳述されているはずの「歴史的過去」や「伝統」に関わる歴史学的・社会学的文献において、この相対立・拮抗する、過去性と未来性という二つの性格の交差がいかにか表現され織り込まれているのか、を追求する。その際、オルテガの著作において「近代」に対立する意味での「過去のなるもの」が「封建主義」・「ゲルマン精神」・「伝統主義」・「貴族」・「過去」などの多様な意匠をまとめて変幻し表現されるが、これは当面の考察対象に応じてオルテガ本人が彼の歴史的パースペクティブを変化させるからであろう。オルテガ自身、次のように言っている。「実在が一定の距離から考察される場合、実在と一致する概念は、その距離が短縮されると別の概念と取り替えられ、この概念が実在と符合するものとされねばならない。思考は、外界を眺めるはたらきと同様、パースペクティブの法則のもとにおかれる」と<sup>7)</sup>。そこで本論文ではとくに、オルテガの歴史学的・社会学的文献上の歴史的過去、伝統主義、封建主義に関する見解を採り上げて、歴史的過去の実在性、伝統主義の価値、封建主義の正当性を確認しつつ、それぞれにおいてオルテガの生の基本的特性としての過去性と未来性がいかに表明されているのかを考察してみよう。

#### 四 歴史的過去

ではまず、オルテガは歴史的過去に関していかに洞察していたのであろうか。「過去」がいかに捉えられるかは、「過去」がオルテガが最終的に達成した歴史的理性に直接的に関係している概念ゆえに、きわめて重要な命題である。そこで歴史的理性を解説した1935年の著作『体系としての歴史』では彼は、次のように過去を把握している。「人間は、彼に起こってきたものであり、彼が為したものである」。他のことを彼は為すこともできたが、しかし、実際に彼が為したその過去が、彼が生涯背負っていかねばならない、「取り消しがたい体験の行程」を形成するのである。その意味で人間は存在の旅人、巡礼者なのである。人間に「本来的な、原則的に無制限な可能性の中にただ一つ、すでに確定された、与えられた、そしてわれわれを方位づけるところの固定線がある。そのただ一つの制限、それがすなわち過去である」。すなわち「すでになしてきた生の経験は、人間の未来を制限する」のである。それゆえ人間は過去を顧慮して生きる歴史的な存在なのである。「要するに、人間は自然を持たない。人間が持つものは……歴史である。あるいは同じことだが、事物にとって自然であるところのものが、人間にとっては歴史

なされたこと *res gestae* としての歴史なのである」とオルテガは言明するのである<sup>8)</sup>。

さて、オルテガはなにか問題に対処するとき、自らの生・理性主義の原理に従って自分の現前の現実の問題から出発する。すなわち現代の大衆社会の現実に対決することによって、オルテガは「歴史的なるもの」や「過去のなるもの」に関して一定の肯定的評価を導き出すのである。オルテガを一躍有名にした代表作『大衆の反逆』は当初《El Sol》紙に発表され1930年出版されたが、この書物はヨーロッパを焦点に当てた、20世紀を代表する大衆社会批判の著であるばかりでなく、時代を見通す哲学的知見が随所にちりばめられた文明論の著作でもある。それゆえここでは、現代に生きる大衆に対する批判的言説を通し、哲学的な考察が加えられて間接的ながら歴史的過去の実在性と価値にそれなりの肯定的評価が与えられている。以下、この著を中心に彼の見解を検討してみる。

##### 1 大衆人における過去の欠如

まずオルテガは『大衆の反逆』の「フランス人のための序文」で、均質的な大衆人がヨーロッパ大陸の全域を覆い尽くし、ヨーロッパの生が窒息するまでに西欧文明の宝を食い尽くしている様を厳しく非難し、次のように言っている。「この大衆人とは」「過去という内臓を欠いた人間であり、したがって『国際的』と呼ばれるあらゆる規範に従順な連中である」。彼らには『中身』が、つまり頑として他人のものとなることを拒否する譲渡不能な彼自身の精神が、取り消すことのできない自我が欠如しているのである。『大衆人はただ欲求のみを持っており、自分には権利だけがあると考え、義務を持っているなどとは考えもしない。つまり、彼らは自らに義務を課す高貴さを欠いた人間 *sine nobilitate* であり、俗物 *snob* なのである」と。またこの著作のなかで、オルテガが「過去」に言及しつつ現代文明・文化批判と現代大衆批判を展開している部分を検討してみよう。現代人の生感情に関してオルテガは、「われわれの生は過去のあらゆる生よりもスケールが大きいと感じ、いかなる過去の他の時代の生よりも「自分の生のほうがより豊かであると信じこみ、過去に対するあらゆる尊敬、あらゆる顧慮を失っている」と言う。かくして現代人は「歴史上初めて、すべての古典主義を排除し、いかなる過去にも模範や規範のある可能性を認めない時代に出会」っているのである。このようにオルテガは、過去を欠如した大衆人や歴史を尊重しない現代文明を批判することで間接的ながら、過去や歴史の実在と価値を肯定的に評価しているのである。しかもオルテガはこのように現代大衆人が過去

への尊敬を喪失した状況を糾弾しつつも、一方では人間的生の未来主義的性格を予言するごとく、「この時代は、数世紀にもわたるたえざる発展の末に突如現われたにもかかわらず、発展の始まり、一つの夜明け、一つの開始、一つの揺籃期のように思える」と鋭く指摘している<sup>9)</sup>。

## 2 過去の性格と過去への対処

さらにオルテガは、歴史的過去の実在性について次のような本質的な考察を展開している。「歴史とは人間の現実」であり、「現在あるがごとき歴史は、人間の現実の中で形成されたのである」。それゆえ「過去を否定することはばかげたことであり、虚妄である」というのはオルテガによれば、「過去とは『人が全速力で駆け戻るところの自然なるもの』」なのであり、「過去から現在への時の推移という営みは、われわれが過去を否定せんがために行なわれたのではなく、逆にわれわれが過去を完全なものにするようにとなされたのである」<sup>10)</sup>。「過去は、その本質からしてこの世界に戻ってくる亡霊 *revenant* であり、たとえわれわれが投げ捨てても、それは必ず戻ってくる」ものなのである。このように過去の本質を捉えるオルテガは、過去に対処する人間の本来的な姿勢を提唱している。すなわち「過去を真に克服する唯一の道は、それを投げ捨てるのではなく、過去を考慮にいれ、それを避けるためにつねに目前において振舞うことである」と言うのである。つまり大事なことは「歴史的時点に対する過敏な意識をもって『時代の高さに』生きること」であると忠告するのである。

それゆえオルテガに言わせれば、「過去にはそれなりの正当性がある」のである。もしわれわれがその正当性を認めないと、過去はそれを要求するために再び回帰し、本来持っていなかった正当性をも強引に主張するかもしれないのである<sup>11)</sup>。世間的な歴史観は「過去を、それが起こった日付けのところで生命なく横たわる抽象的な、非現実的なものにしてしまう」のに対して、オルテガの見解では「過去はこのわれわれの今日を支えている生きた、能動的な力」なのである。歴史というものは過去が遠隔作用して現代に影響を与えるようなものではなく、過去は私のうちにあるのである。オルテガは「過去は私である、すなわち『私の生』である」と言っている<sup>12)</sup>。

そして、このような「過去」に対処すべき態度としてオルテガはヨーロッパについて、社会や政治生活が真の姿に立ち返るためには「前もって裸になり、自分の本質だけになるまで付属物を捨て去り、自分自身と一体化」、「裸体化、真正化」することを提唱する。歴

史的過去の現実を事実そのままに受け入れ真正にそれになりきってこそ、「過去全体を前にしても、過去にとらわれない完全な発想の自由」が可能であると言う。そして、「過去を支配すべき者は未来なのであり、われわれは未来から、過去に対してどのような態度をとるべきかの指令を受け取る」と言っている<sup>13)</sup>。さらにオルテガはボルシェヴィズムやファシズムを批判しつつ、「過去」に対して採るべき態度を次のように提示する。彼によればこの両者とも、「時代の高さ」に達しておらず、「野蠻への後退」でしかないのである。両者ともその内部には、過去を越えるための不可避的な条件である「過去全体の縮図」が内蔵されていなかったのである。オルテガは事実として存在した過去を相手にして喧嘩・否定しても無駄だから、過去に勝つためには、過去を飲みこみ「過去全体を消化」する必要があると言う<sup>14)</sup>。それゆえオルテガは、ヨーロッパの運命が「真に『時代と共にある』人びと、つまり、自分の足下で今までの歴史全体からなる底土が脈打つを感じる人びと、今日の生の高さに通じていて、あらゆる古風で未開な態度を嫌悪する人びと」の手に委ねられることだけが、ヨーロッパを救い得ると予言するのである<sup>15)</sup>。

## 3 過去と未来主義

そしてオルテガは「未来的なるもの」の動的性格としての未来主義との関係では、過去を次のように捉える。オルテガは国家の下で共同の生活を行うためには、「生きるとは、未来に向けてなされる何ものかであり、この瞬間から近い未来に向かう一つの行動」であり、したがって「過去をくり返すためとか、いわんやたんに一緒に住むためとかではふじゅうぶんなのである」と言っている<sup>16)</sup>。すなわち人間は過去からずっと同じ国家の下一緒に生活してきたことのみならず、未来に向けての共通の目的があるからこそ共同生活できるのだと指摘しているのである。また、次のようにも言っている。「人間の生は、好むと好まざるとにかかわらず、たえず未来の何かに従事している。われわれは現在のこの瞬間から、来たるべき未来のことに気を配っているのである。だから、生きるということは、つねに休むことも憩うこともなく、行なうことである」と。つまり過去の追憶も含めて人間のあらゆる行為が、未来の実現を意味していると言うのである。すなわち、追憶という慎ましやかなひとりだけの喜びも、少し前には望ましい未来に思えたからこそ追憶という行為を行なうのである。そしてオルテガは古代人が未来を過去の規範に服せしめる「懐古主義者」であったのに対して、われわれヨーロッパ人は未来に、新しいものに、より大きな自律性を与える「未来主義者」であると指摘

して、「人間は不可避的に未来主義的な構造を持っている」と言う。だから彼は人間は、「なによりもまず未来のなかに生き、未来によって生きている」と考えているのである。

さらに、国民国家という存在に関してもオルテガは、共通の過去と未来の共通の計画の必要性を指摘している。すなわち「国民国家は、共通の過去を持つ前にその共通性を創造しなければならないのであり、しかもそれを創造する前に、共通性を夢み、欲し、計画しなければならないのである」<sup>17)</sup>。彼は「国家の存在にとって決定的なのは昨日や過去や伝統的遺産」であるとすする誤りは、「国家の起源を家族すなわち生来の、誕生前からある祖先伝来の共同体のなかに、要するに過去のなかに求めるところから来ている」のであって、「国家は明日への計画を持つことによって形成され、存在するのである」と言明しているのである<sup>18)</sup>。

以上のようにオルテガは個人的生においても集団的・国家的生においても、「過去」に実在性と一定の積極的価値 過去性 を肯定しながら、さらに未来に向かう人間の未来主義的構造 未来性 を指摘するのである。

## 五 伝統主義

オルテガは1923年に出版した彼の最初の哲学的著作『現代の課題』に付録として加えた小論「革命の終焉」で、 伝統主義的精神 合理主義的精神 神秘主義的精神の三つの精神を考察している。この相互に異なる三つの精神は古代のギリシア史にもローマ史にも、またヨーロッパ史にも出現したように、歴史上何回も周期的に繰り返し展開される歴史的精神様式なのである。そこではオルテガは伝統主義を歴史上の一つの確固たる精神的実在と認めているが、それは次の合理主義的精神によって取って代わられるものとして設定されている。

### 1 伝統的社会における伝統主義

オルテガは「伝統主義」について次のように言っている。すなわち伝統的な社会においては、「個人的なもの」は人間に恐怖感を呼び起こす「弱さや欠乏と同義語」である。「堅固さや確実さ」は「個体に先立って存在する集団の中」に見いだされる。だから生に目ざめるとき、各個人はすでに在ったものとして自己を見いだす。かくして「集団の財宝ともいべき神話や伝説」を「自分が発見したものでないがゆえに、その合理的な意味がまったくわからないがゆえに、まさにそれゆえに信ずる」のである。彼らにとって思考や意欲や感情は、「古くからの心的態度のレパトリーを繰り返す」ことなのである。ここでの各人の「自発的な在り

方」とは、各人の全生活がその中ですごされるところの「伝統や伝説に熱烈に服従し、それに適応してゆく」ことなのである。このような態度が、われわれの中世に特徴的であったところの、またギリシア史を紀元前7世紀まで、ローマ史を前3世紀まで支配したところの伝統主義的精神態度であった。幼児が両親に頼るごとく、「中世の人間」は一行為を決定する際にも、「教父たち」のなしたことに注目した。「慣習法」の基礎も、正義にあるので公平にあるのではなく、「古くからあるという不合理な事実」にあった。こうした伝統主義の魂は政治的領域においては、「既成の体制に恭順に適合して」生きようとする態度を生む。新たな事態が起こっても既成の体制を改変しようとする者は存在せず、「むかしからの伝承物の中へそれをはめ込む」だけであった。こうした伝統的集団のなかでは人間は「彼自身の行為の主人公」でもなく、彼の人格は「他者と区別された彼独自のもの」でもない。あらゆる個人においてつねに「同じ精神、同じ思考や記憶や欲求や情緒が繰り返され」、重要な相違といえばただ「地位、身分、職業あるいは階級の相違」だけであった<sup>19)</sup>。このようにオルテガは実際上の伝統主義的精神の内実、すなわち歴史上の実在の有り様を規定する。

### 2 大衆人における伝統の欠如

ではオルテガは、こうした「伝統」の過去に対する現代人の精神態度をどのように捉えているのであろうか。これが『大衆の反逆』のテーマの重要なポイントであった。前述したごとく、オルテガは現代の大衆人が過去の規範や伝統に対して尊重の念で接しないことを非難して次のように言っている。「現在と過去とのこの決定的な乖離(かいり)」が露わになっているわれわれの時代においては、「今まで残っていた伝統的な精神は蒸発してしまい、もはや模範も規準もわれわれの役にはたたない。芸術であろうと政治であろうと、われわれは自分たちの問題を過去の積極的な協力なしに、現在のただなかで自ら解決しなければならないのである」と<sup>20)</sup>。またオルテガは『現代の課題』では現代における伝統主義者の心理と合理主義者のそれとを対比して、次のように言っている。「伝統主義者というものは本来自己自身と一致しているものである。彼は自己の内奥の神秘的な動因によって神秘を信ずるのである。だから彼は、いかなる瞬間にも躊躇(ちゅうちょ)や留保を感じることなく、戦いの試練を甘受することができる」。これに対して、「聖母像を信仰するように合理主義を信じこんでいる人は、その心の底では合理主義を信ずるのをもうやめてしまっているのだと言てよかろう。と言うのは、彼は心的惰性から、習慣から、

迷信から、要するに伝統主義から、もう創造的理性を失って強直し、儀礼化し、装飾化してしまった古くさい合理的命題をただ固執しているにすぎないものなのだから」と<sup>21)</sup>。したがってオルテガは現代大衆における伝統の欠如を非難することによって、伝統主義を肯定的に価値づけているのである。

### 3 国家における伝統と企画

さてでは、1960年に死後出版された、オルテガの晩年の著作『ヨーロッパ論』では「伝統」についていかなる評価を与えているのであろうか。青年期には社会主義にも傾倒したことのあるオルテガであったが、老年になると保守化し「伝統の価値」を明確に承認することになる<sup>22)</sup>。すなわち、オルテガは「国家は企画と伝統との合一体である」と明確に規定している。しかし他方、「国家」という「複雑微妙な社会状態の胚胎を可能にする第一の必須条件」は、「国民においても、民衆においても、共通に存在している伝統的で後ろ向きの力に在るのではない」と指摘している。では伝統的で後ろ向きの力は国家においてはいかに位置づけられるべきなのか。これについてはオルテガは「われわれは、いずれの場合にも、この後ろ向きの力が、他の力、すなわち、活動の力、生の企画の力との間に持っている種々な関係の中に、その条件を求めねばならない」と言っている。

同じようにオルテガは、新しくゲルマン民族がローマの地に入り、ローマ化した民族と混合したとき、彼らは「伝統的な自己の生と、模範的なローマの生といった、二重の生を持たねばならなかった事例を挙げる。ローマの文明はすでに純化され高められた「全人的な在り方」として現われ、ヨーロッパの中世期に「青年の心を持つ人びと」が単に伝統や惰性から脱出するためのみならず、ローマの模範的な在り方を学習・鍛錬したがゆえに、「模範的であれ、という命令と、彼らの住む土地の孕（はら）んでいる一種のローマ的な規範とから成る、各民衆の伝統の『具体的な』内容が、結局、伝統と企画を同時に包含するようなタイプの社会を生むことになり、これが「国家」となったと彼は指摘している<sup>23)</sup>。したがって、以上からして、オルテガは「伝統」に一定の評価を与えつつも、それだけでなく「企画」や「模範的な在り方」を国家の必須条件として挙げるのである。すでに人間個人についても人間集団に関しても、彼自身の確固たる理論構造を掌握したオルテガは次のように述べている。「個人としての、あるいは集団としての人間は、常にその惰性的な存在 受動的、伝統的な と活発な存在 積極的で、問題に立ち向かってゆく存在 との方程式」であると<sup>24)</sup>。す

なわち人間個人に関しても、人間集団・人間社会に関しても、惰性的・受動的・伝統的存在と活発な・積極的・問題対処的存在との方程式、つまり筆者が本論文で提示した過去性と未来性との方程式が存在するというのである。

## 六 封建主義

以上の歴史的過去の実在と伝統の価値に裏打ちされて、封建主義は「近代」の前の「中世」の伝統的社会構造の主要な社会的支柱となった。では「近代」批判の思想家としてオルテガは中世期のこうした封建主義にいかなる評価を与えているのであろうか。ここでは、オルテガの最初の社会学的・政治学的著作『無脊椎のスペイン』を検討してみよう。1921年に出版されたこの著作は1920年に《El Sol》紙に発表されたオルテガのスペイン論であり、古代ローマから現代にいたるスペインの歴史を鳥瞰しスペインの病状を診断している<sup>25)</sup>。この著作のなかでオルテガは、スペインの衰退の原因を「封建主義の軟弱さ」に起因する「すぐれた人物の欠如」に求めているのである。そこで、この著に現われた「過去のなるもの」として封建主義を採り上げて、これを考察してみよう。

### 1 封建主義・ゲルマン精神

オルテガは「封建制度[封建主義]」について次のように規定している。「厳密には『領主』あるいは『貴族』相互間の関係を定めるために、11世紀来とられてきた法律上の諸形式全体だけを封建制度と呼ぶべきであろう。しかし重要なことはそのような諸形式の図式化でなく、そのような形式に先立ち、そのような形式がなくなった後も生き続けていた精神である。私はこの精神を封建主義と呼ぶ」と。そしてこの封建主義は結局はゲルマン的精神を意味するのだが、彼はこのゲルマン精神を次の二点でローマ精神と対比している。ローマ精神は「機構としての国家」の樹立を最重要事とし、「個々人の存在や行動をその国家、つまり市民の総体 *civitas* に従順な成員としか考えなかった」。これに対してゲルマン精神にとっては「国は腕っぶしの強さと度量の広さから他の人びとに己れを受け入れさせ、その人びとをあとに従わせては領土を征服し、己れを土地の『主』となすすべを心得ているたくましい数人から成り立っていた」。さらにローマ人は自分たちの土地の「主」ではなく、ある程度まで土地の「僕（しもべ）」として「百姓」であった。逆にゲルマン人は、国が周囲から圧迫されているときは農業についたが、ローマ帝国の軍隊が弱体化すると南部・西部の田畑を手に入れ「征服した民族にその耕作を引き受けさせ、



「自分では耕作しないという、そうした形の土地支配」たる「領主権」を確立したのである<sup>26)</sup>。

## 2 ゲルマン領主の法的感覚

またゲルマン領主の法的感覚に関しては、オルテガはローマ人や民主主義者の法的感覚と比較して、次の二点を述べている。ローマ人や民主主義者は元老院令や民法などの、「ゲルマン人とは違った生の感覚、したがって権利の感覚の内に閉じこもり、ゲルマン人を「権利の乱暴な否定者」とみなしていた。これに対して、ゲルマンの蛮族の「領主」は、ローマ人と同じくらいの「法的信念と尊崇の念をこめて」、「この土地に対する余の権利は、余が戦いでこれを手に入れ、これを失わないためには、必要であろうすべての戦いに応じる心づもりであるということにある」という言葉を厳かに宣言したのである。それゆえゲルマン領主に理解できないのは「百姓の『仕事』が所有権の一つ」と考えられていることであつた。つまり、ここでは「二つの異なる法的感覚」が存在するのである。「領主」の領有を基礎づけていた「正当性」の質と、今日怠惰な資本家に利益を得させていたいへん問題の多い「正当性」の質とが単純には比較できない種類のものであるとすれば、百姓の「仕事」も戦士の「力闘」も「ともども高く評価さるべき、二つの型の汗の流し方」であつて、「百姓の手のまめと戦士の負傷は、共に意味に満ちた権利原則を表わしている」のである<sup>27)</sup>。

## 3 ゲルマン領主の権威権

さらにゲルマン領主の権威権の特徴についてはオルテガは、現代の法律学者の土地所有権のそれに比して次のように指摘している。現代の法学者が「土地所有権と呼んでいるもの その土地から上がる利益に対する権利」は、絶対にゲルマンの領主の心を強く奪うことのない経済関係であつた。ゲルマンの領主が関心をもつのは、「領地の一角で起こった犯罪を裁くのは誰なのか？さまざまな慣習を統轄するのは、人間の集団を社会組織にまで持って行くのは誰なのか？」ということであつた。すなわち、ゲルマン人の関心は「土地の経済的所有権でなく、権威権」なのである。土地は全面的に農民に委ね、土地の所有者よりも「主」であることを望んだのである。「彼の精神は資本家に宿っているのとは根本的に反対」で、土地の経済面への関心は低く、彼の欲しているのは「儲けること」でなく、「支配し、判断し、家来を従えておくこと」であつたのである<sup>28)</sup>。

## 4 中世の気性・経済観念

したがってオルテガは「中世の気性・経済観念」と「資本主義経済の経済観念」を比較して次の諸点を挙げ

る。中世の経済観念は今日行なわれているものの「完全な裏返し」である。すなわち資本主義経済では富の問題は、主に「いかにして儲けるか」にあるが、中世経済の関心事は「いかに消費するか」にあつた。中世の経済観念では、正しい経済配分の問題は、「現代行われているのとは逆の方向で」解決されるだけでなく、同時に当然のことだが「逆から提起」される。ここでは各人が「どれだけ儲ける権利があるか」が問われるのではなく、「どれだけ消費する義務があるか」が問われているのである。因みに聖トマスは、「人はそれぞれ身分相応の生活に必要な富の分け前に与かる」と言ったのである。貴族、司法官、高僧は「自己の行為に職務、階級にふさわしい装飾、衣裳をかぶせる義務」がある。それゆえ金銭は身分、権威に対応しなければならず、「身分・権威それ自体はより高度の精神力の印」である。各人は、「それだけの働きをしたからそれだけ稼いだ」のではなく、「それだけの値打ちがあるからそれだけ稼いだ」というのである。したがって、もし労働の崇拜者であるわれわれの時代の経済倫理が労働のもつ「生産物全体に対する権利」という言葉に要約できるなら、中世の経済倫理は「権威の完全な尊重の権利」という言葉の中にその傾向を表わし得るのである<sup>29)</sup>。

## 5 封建主義の擁護

オルテガはこの著作では以上のように、ゲルマン精神に基づく封建主義をかなり高く評価するのである。彼はこのゲルマン精神の封建主義こそが「すぐれた人物」を創りだす歴史的文化と考えているようである。さらに2年後に公刊した『現代の課題』に付録として加えられた「革命の終焉」という小論でも間接的ながら、中世農夫の観念と近代市民の意識の差異を示唆しつつ中世の封建領主を擁護しているように見える。すなわち、「中世の封建領主たち」が狩猟のために馬を疾駆させ農夫の畑の穀物を踏みあらしても、「農夫」はそうした虐待の連続を阻止するためには「社会の全機構を根底から（ラディカル）変革」しなければならない、というような考えには思いつかないのである。それに対しわれわれの時代では、「踏みにじられた市民の憤怒」は、彼を踏みつけた誰かの足に対してでなく、そうした踏みにじりを可能にする「世界の全構造」に向けられる。それゆえオルテガは、「中世人は統治の乱用に対して怒り」、「近代人は慣行に対して（つまり統治そのものに対して）怒る」と言うのである<sup>30)</sup>。したがってこの部分では、市民が主役となる「近代」に対比しつつ、「中世」の社会構造にそれ相応の正当性を承認しているのである。しかし『大衆の反逆』には「封建主

義」という言葉は見当たらない。

以上、「過去のなるもの」として、封建主義・ゲルマン精神、ゲルマン領土の法的感覚、ゲルマン領土の権威権、中世の気性・経済観念についてオルテガの見解を検討してきたが、彼の封建主義は過去性の表出たる歴史的過去の実在や伝統の価値の当然の肯定の上に成立するものであるが、それよりもむしろ封建領土の活力・精神力に基づくその支配の正当性を一層重視しているように見える。

## 七 おわりに

以上、筆者は「過去のなるもの」についてオルテガが述べた文章において、「歴史的過去」の実在の上に「伝統主義」が価値づけられ「封建主義」が正当化されるのを確かめつつ、その各々において「過去のなるもの」の性格として当然表明されている「過去性」のみならず、これとは反対の性格をもつ「未来性」までもが人間の生の特質として陳述され、双方がいかに交差して言明されているのかを考察・検討した。伝統的社会から近代社会へと変遷した人間社会は現代に至っては、伝統や過去の価値を全く断ち切った大衆社会に行き着いた。こうした、近代社会が行き着いた末の現代大衆社会においてもオルテガは再び過去や伝統の価値の実在性を承認するのみならず同時に、人間が自らの問題に対処していく未来に開かれた活力・精神力の必要性をも訴えている。結局、西洋思想史上「近代」からポストモダン時代への移行期に位置づけられる哲学者オルテガは人間個人の個人的生であれ社会や国家などの集团的生であれ、歴史的過去や伝統などの実在 過去性 を認めつつも、それを基礎とした、未来に向けての生の計画 未来性 を重視しているようである。一般に歴史上、「過去のなるもの」は論理的には、現在と未来が存在するために存在理由を持っている。過去において伝統や慣習が存在しなければ、現在や現代も存在する訳がないし、未来も存在することができないからである。しかし現代人は意識の上では、「近代」思潮の理性主義や人権主義によって過去の重荷や運命から解き放たれ、「近代」の自由と平等を感じるあまりにまるで過去など存在しなかったかのように、伝統や過去の価値を意識せずに生活しているのである。しかし、これこそオルテガが非難してやまない現代の大衆人の生活態度なのである。だが彼の洞察するところ、真実は、人間の視界に入る限りの歴史的過去を考慮に入れ未来に生を架ける「生・理性」や「歴史的理性」によってこそ明らかにされるのである。

## 《注・引用・参考文献》

- 1) Ortega y Gasset, J.: La rebelión de las masas (1930), Obras Completas, Tomo , 121, 162, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、大衆の反逆、オルテガ著作集2 24、82 白水社、1969
- 2) 大矢吉之・奥村文男編：関西民間憲法臨調叢書、関西民間憲法臨調、2005：「日本の教育改革」有識者懇談会：なぜいま教育基本法改正か 子供たちの未来を救うために、PHP研究所、2004；西澤潤一編：新教育基本法6つの提言、小学館、2001；中西輝政編：憲法改正、中央公論新社、2000；大原康男・百地章他：新憲法のすすめ 日本再生のために、明成社、2001；西修：日本国憲法を考える、文藝春秋、1999；藤原正彦：国家の品格、新潮社、2006
- 3) Ibid.; 同上訳書：Giner, S.: Mass Society, 75 - 79, Martin Robertson, London, 1976；長谷川高生：大衆社会のゆくえ オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座、ミネルヴァ書房、1996；Hasegawa, K.: Minoría, Masa e Intelectual Popular - La cima del pensamiento político de J. Ortega y Gasset -, 1 - 13, 近畿福祉大学紀要、4/1, 2003 \*オルテガ思想においては「過去」概念と「歴史」概念とは相当に近接した意味を付与されているようである。しかし、本論文では「伝統」や「過去」という概念を考察対象とするが、「歴史」という概念は扱わない。というのはオルテガ思想においては「歴史」概念は厳密には「過去のなるもの」というよりもむしろ、もっと普遍的な意味を与えられて、「理性」に対立する「可動的なるもの」、「変化するもの」として考察されているからである。たとえばオルテガは次のように言っている。「理性の見地からすれば、つねに転変する歴史のごときはまったく意味のないものである、そして歴史とはまさしく、理性の出現を妨げる障害物の歴史なのだ。理性主義は反歴史的である。近代合理主義の祖デカルトの体系の中では、歴史はその場所をもたない、と言うよりはむしろ追放されている。」(Ortega y Gasset, J.: El tema de nuestro tiempo (1923), Obras Completas, Tomo , 158 - 159, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983；井上正訳、現代の課題、オルテガ著作集1、201、白水社、1970) \*またオルテガの晩年の著作『人と人々』の主題となっている「慣習」概念も、「過去のなるもの」とは重複する部分もあるが別種概念と考えて、ここでは考察の対象としない。

- (Ortega y Gasset, J.: El hombre y la gente (1957) Obras Completas, Tomo , Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; アンセルモ・マタイス・佐々木孝訳、個人と社会 《人と人々》について 白水社、1969
- 4) Ortega y Gasset, J.: ¿Qué es filosofía? (1957), Obras Completas, Tomo , Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 生松敬三訳、哲学とは何か、白水社、1969; Marino, J. F.: José Ortega y Gasset, Perspectives on the Forms of Human Temporality, Ph. D., The City University of New York, New York, 1979
- 5) Booher, R. L.: The Concept of Life in the Philosophy of José Ortega Y Gasset, Ph. D., 105 - 123, The University of Tennessee, Tennessee, 1979  
\* オルテガの生・理性主義に関しては、Acuña, H. L.: La metafísica de Ortega y Gasset, La Génesis del Pensamiento de Ortega, 242 - 251, Compañía General Fabril Editora, Buenos Aires, 1962; Gaete, A.: La metafísica de Ortega y Gasset, El Sistema Maduro de Ortega, 50 - 63, Compañía General Fabril Editora, Buenos Aires, 1962; 拙稿 オルテガ哲学的生命論 ポストモダンの政治哲学における人間像の原型を求めて、政治経済史学会、政治経済史学、414、1 - 18、2001などを参照のこと。
- 6) Olleta, J. E.: Categorías del Vivir, Historia de la Filosofía, Volumen 3, Filosofía Contemporánea, <http://www.e-torredebabe.com/Historia-de-la-filosofia/>
- 7) Ortega y Gasset, J.: El ocaso de las revoluciones, Un apéndice de El tema de nuestro tiempo (1923), Obras Completas, Tomo , 209 - 210, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983, pp. 209 - 210; 井上正訳、革命の終焉、現代の課題の付録、オルテガ著作集 1、273、白水社、1970
- 8) Ortega y Gasset, J.: Historia como sistema (1941), Obras Completas, Tomo , 41, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 井上正訳、体系としての歴史、オルテガ著作集 4、338、白水社、1970
- 9) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 121, 162; 前掲訳書・註 1) 23 - 24、82; Giner, S.: op. cit., 75 - 79
- 10) Ibid., 125; 同上訳書、28 - 29
- 11) Ibid., 206; 同上訳書、146
- 12) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 44; 前掲訳書・註 8) 345
- 13) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 194 - 195; 前掲訳書・註 1) 129
- 14) Ibid., 205; 同上訳書、144
- 15) Ibid., 206; 同上訳書、147
- 16) Ortega y Gasset, J.: España Invertebrada (1921), Obras Completas, Tomo , 71, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、無脊椎のスペイン、オルテガ著作集 2、285、白水社、1969
- 17) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 265 - 266, 267; 前掲訳書・註 1) 232 - 234、235
- 18) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 57; 前掲訳書・註 16) 264 - 265
- 19) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 211 - 213; 前掲訳書・註 7) 275 - 278
- 20) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 162; 前掲訳書・註 1) 82 - 83 Ortega y Gasset, J.: La deshumanización del arte (1925), Obras Completas, Tomo , 428, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983
- 21) Ortega y Gasset, J.: El tema de nuestro tiempo (1923), Obras Completas, Tomo , 174 - 175, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 井上正訳、現代の課題、オルテガ著作集 1、218、白水社、1970
- 22) Cepeda Calzada, P.: Las ideas políticas de Ortega y Gasset, 221 - 223, Universidad de Valladolid, Valladolid, 1968 \* セペーダ・カルサーダはオルテガの政治思想の変遷を 社会主義期 自由主義期 (1914 ~) 教義的自由主義期 (1931 (?) ~) 自由主義幻滅期 (《Del Imperio Romano》『ローマ帝国をめぐって』(1939) ~) 保守主義期 (《Meditación de Europa》『ヨーロッパ論』(1949) ~) に区分している。
- 23) Ortega y Gasset, J.: Meditación de Europa (1949), Obras Completas, Tomo , 284 - 285, Revista de Occidente, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 吉田秀太郎訳、ヨーロッパ論、オルテガ著作集 8、201 - 202、白水社、1970 \* 1930年に刊行された『大衆の反逆』の「フランス人への序文」でオルテガは、イギリスの国家のあり方を賞賛して次のように言っている。「イギリスは、ほとんどすべての部門において他国に先んじ、より早く未来に到達した国家である。」「それでイギリスは、この上なくダンディ dandysmo なものを持つる種の横柄さでわれわれに古式豊かな儀式を目撃させ、王冠と王笏(おうしゃく)という、

イギリスの歴史のなかでは最も古い、不可思議な力を持つ道具がどんな働きをしてきたか なぜなら、これらはたえず現実的なものだったので、を納得させるのだ。」「イギリス人はわれわれに、彼らの過去は、それがまさしく過ぎ去ったがゆえに、つまりそれが彼らのもとを過ぎ去ったがゆえに、彼らにとっては今でも存在し続けているのだということを一生懸命教えようとしている。」「われわれがまだ到達していない未来の一点から、彼らの過去が依然として有効性を持っていることを教えているのである。この民族は、自分の過去のなかを自由に動き回り、過去のあらゆる時代を完全にわがものとし、それを積極的な働きをする財産として保持している。」「オルテガの見るところ、これこそが「真の人間からなる国家のあり方」なのである。すなわち、「未来のために生きながらも、引き続き過去をも生きること、つまり真の現在に生きることである。というのは、現在とは、過去と未来が実際の作用を及ぼしながら存在している場所だからである。」(Ortega y Gasset, J.: op. cit., 137 - 138; 前掲訳書・註1) 47 - 48)

24) Ibid., 278; 同上訳書、190 「実在とは活動することに在ることは、何かある目標に向けて張られた弓によって表わされ得る」と言ったライブニッツの思想はフィヒテにおいて円熟する。オルテガはフィヒテに敬意を表して、「活発な存在」という言葉を用いた。フィヒテは「人間を一義的に、かつ基本的に reine Agilität つまり『清らかな快活さ』だと定義した最初の思想家である」と言う。

25) 桑名一博、解説、前掲訳書・註16) 366

26) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 113 - 114; 前掲訳書・註16) 341 - 342

27) Ibid., 114; 同上訳書、342 - 343 \*セペーダ・カルサーダの主張するオルテガ政治思想の「自由主義期」において、オルテガは『無脊椎のスペイン』(1921)では「封建貴族」を高く評価するけれども、『大衆の反逆』(1930)では「世襲貴族」についてはかなり批判的である。これはオルテガのアンビパレントな態度、よく言えばパースペクティブの変化を例証するものであろうが、サンチェス・カーマラが言うように、オルテガの政治思想の変遷のすべての時期に亘って、一貫して精神貴族主義的の主張が優位している。(Sanchez Carra, I.: La teoría de la minoría selecta en el pensamiento de Ortega y Gasset, 226, Editorial Tecnos, S. A., Madrid, 1986)オルテガは「世襲貴族」に関して本来の「貴族」と対照させて次のような諸点を挙げている。

「『貴族』というような人の心を奮い立たせる言葉が」「多くの人にとって世襲的な『血筋による貴族』を意味するとき、何か一般の権利と似たものによってしまい、生気のない物のように受け継がれたり譲り渡される、静的で受動的な性質を帯びたものになってしまう。しかしこれに対して、「この言葉本来の意味、『貴族』という言葉の語源 etymo は本質的に動的なものである。高貴な人とは『知られた人』を意味する。無名の大衆から抜きんでて自己の存在を知らせた人、すべての人が知っている人、有名な人のことである。この言葉には名声をもたらした測り知れない努力の意味が含まれている。したがって「高貴な人とは、努力をした人、すぐれた人と同じである。」

「貴族、つまりすぐれた人間の息子であるという名声は、もはや純然たる余禄にすぎない。貴族の息子は、彼の父親が有名になりえたがために有名であるにすぎないのだ。彼は父親の名声の反映によって有名なのである。事実、世襲貴族には一種の間接的な性格がある。世襲貴族とは反射光線、死者の名声を反射している月光貴族である。こうした月光貴族のなかに生きつづけている真正で、力動的なものといえば、祖先が達成した努力の水準を維持するように、子孫を上げます鞭撻だけである。このような気の抜けた意味においてさえ、貴族には責任がある noblesse oblige のだ。」

「初代の貴族は自分で自分に責任を課したが、世襲貴族には祖先の遺産が責任を課しているのである。いずれにしろ、初代の貴族からその後継者へと貴族の身分が継承される過程にはある種の矛盾がある。」「『貴族』という言葉は、ローマ帝国が生まれるまでは正式な言葉として使われていない。それが使われたしたのは、ほかでもなくすでに墮落していた世襲貴族に対抗させるためであった。」「こうした世襲貴族に対して、オルテガにとっての「貴族とは活力に満ちた生と同義語である。つまり自分自身を越え、すでに獲得した物を越えて、自らに対する義務や要求として課したもののほうへ進もうと、つねに身構えている生のことである。」「このように、「高貴な生は凡俗な生、すなわち無気力な生と対置されるが、こちらの生は、自分自身のなかに閉じこもったまま、外部の力で自分の外へ出ることを強制されないうざり、永遠の逼塞を宣告されている生である。」「かような生き方をする人間がたくさんいるから大衆だというよりは、その生き方が無気力だから大衆と呼ぶのである。」(Ortega y Gasset, J.: op. cit., 182 - 183; 前

掲訳書・註1) 112 - 114)

「貴族が世襲するということは、自分が創り出したのではない幾つかの生の条件が、したがって彼自身の個人的な生と有機的に結びついて生まれたのではない生の条件が、すでに自分に与えられているのを見いだすことである。彼は生まれたときに突然、どういうふうにしてか分からぬままに、富と特権を持っている自分を発見する。そうした富や特権は彼に由来するものではないから、彼は精神的には、それらとなんの関係も持たない。それはほかの人間、他の生物、彼の祖先のぬけ殻である。」

そして「相続人として生きるということは、他人の生のぬけ殻を用いなければならないということである。これは、どういうことになるのか？『世襲貴族』はどのような生を生きることになるのか、彼自身の生か、それとも傑物であった初代の生を生きるのか？そのどちらでもないのだ。彼は他人の生を演ずるように、つまり、他人でも自分自身でもないように宣告されているのである。」

当然ながら、「彼の生は真正さを失い、他人の生の単なる代理が見せかけに変質せざるをえない。彼が義務として、使わねばならない手段があまりにも多過ぎるため、自分自身の固有な運命を生きることがで

きず、彼の生が萎縮させられてしまうのである。」しかし「生とはすべて、自己実現のための戦いであり、努力である。私が自分の生を実現させるに当たって直面する困難こそ、まさしく私の能力を目覚めさせ、行動をひき起こすものなのだ。もしも私の身体に重さがなかったら、私は歩くことができないだろう。もしも大気が私を圧迫しなければ、私は自分の肉体をあいまいで、ぶよぶよした、お化けみたいなものを感じるだろう。」

それゆえ、「世襲『貴族』にあつては、生を使ったり生の努力をすることがないので、彼の全人格はしだいに輪郭があいまいになって行く。その結果は、家系の古い貴族に見られるあの独特な愚鈍化となる。それは何にたとえることもできないし、厳密に言うと、その内的、悲劇的なメカニズム あらゆる世襲貴族を避けがたい墮落へと導く内的、悲劇的なメカニズム はいまだ誰によっても記述されていないのである。」(Ortega y Gasset, J.: op. cit., 208 - 209; 前掲訳書・註1) 150 - 151)

28) Ibid., 114 - 115; 同上訳書、343

29) Ibid., 115; 同上訳書、343 - 344

30) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 218; 前掲訳書・註7) 285 - 286